

私の一文字「力」

副代表幹事
石村 和彦

AGC
取締役会長



一人ひとりの“力”を発揮させる

会員の方が思いを込めて選んだ一字に、書家の岡西佑奈さんが命を吹き込む「私の一文字」。今回は、石村和彦副代表幹事にご登場いただきました。

岡西 「力」という文字は、二つの成り立ちがいられています。一つが手の筋肉を筋張らせて頑張っている力強さを象ったもの。もう一つが、渡来人が日本にやって来た時に、一から土地を耕して米を収穫するまでに一人の力では成し遂げられない、みんなの力で耕していくものなんだ、というところから作られたともいられています。そこで今回、力強く、手を取り合うように左の払いを上^{かたど}にグッと上げて、手をつなぐようなイメージで書かせていただきました。

石村 「力」は私の座右の銘「人は力なり」から選びました。上司に頂いた言葉ですが、意識したのは2000年に山形県米沢で子会社の社長になった時です。それまで生産設備の設計などを担当し、自信を持って仕事をしていましたが、社長になったら分からないことばかりでした。初めて「自分一人ですることには限りがある。人それぞれの能力が発揮されてこそ達成できることがある」と実感しました。

岡西 そうお感じになったきっかけがあったんですか。

石村 赴任後、最初に経理の方が1億5,000万円の伝票を持ってきたんです。銀行から金を借りるからはんこを押してくれ、と。機械を買うというなら判断もできますが、ただお金を借りると言われても大丈夫かなと思うじゃないですか。判断基準が何もない。それで、「僕がはんこを押さなかったらどうなる？」って聞いたら、「従業員に給料が払えない」と言うんですよ。つまり会社はぎりぎりのキャッシュフローで回っていた。そんなことも全然分かっていなかったで、自分でできることはほとんどないと悟ったわけです。

岡西 4年間の社長時代に業績を見事に回復されました。

書家

岡西 佑奈

1985年3月生まれ。23歳で書家として活動を始め、国内外受賞歴多数。

石村 まず出血部分に集中し、ある程度止まり出したら将来のビジョンを作りました。でも、僕が作ったのではなく、子会社のプロパー社員やAGCからの派遣社員も一緒に混成チームを作って、「自分の会社の未来の姿を考えろ」と。半年くらいかけたかな。当時従業員は600人くらいいたんですが、全員にこのビジョンを浸透させました。従業員みんなが自主的にやったんだと思います。でもその背景には、台湾にAGCグループの工場ができることでわれわれの工場がなくなるかもしれない危機感があった。そこで、本当に勝ち残っていくにはどうすればいいのかを考えようとビジョンを作らせたんです。

岡西 まさに危機感を「力」に変えていくということですね。

石村 そういうことです。社長やリーダーは自分自身が「力」を発揮することも大切ですが、社員全員が持てる「力」を発揮できる環境を整備し、それぞれの能力を引き出していくことも欠かせない役割かと思っています。

岡西 経済同友会でも今後、その「力」をどのように発揮しようとしているのか、教えていただけますか。

石村 経済同友会は経営者の方々が個人の資格で入っています。そういう意味では、私は経済同友会自体が一つの「力」だと思っています。私は今、環境・資源エネルギー委員会に属していますが、日本には2011年の東日本大震災以来、ある意味、環境面やエネルギー面で、上から抑え付けられているような閉塞感があります。もうそろそろ突破しなければいけない時期だと思っているので、しっかり議論していきたいですね。

